★度外視法 （P118）

（例）「キュウリの10日漬け」を製造している漬物メーカー

・5日漬けた段階で行われる品質検査において、当期は仕損品（不良品）が10本発見され、
期末日に、10日漬け（完成品）が70本、8日漬け（仕掛品）が20本あった場合、

事実

・直接材料費については、100本分のキュウリが投入されている。
・加工費については、「完成品（10日漬け）ベースで言うと」、91本分の手間暇がかかっている。
（仕損品になった部分は、その後は加工しない。）

原価計算

仕掛品　　度外視法

∴	完成品	70 (70)
当期投入	正仕損	10 (5)
90 (86)	末	20 (16)

・この場合、仕損品となった10本は、
10日漬けの70本と、8日漬けの20本の両者のために
犠牲となったものであると考え、この10本分の原価を両者に負担させる。

両者負担

・仮に、品質検査は9日漬けた段階で行われる場合、

事実

・直接材料費については、100本分のキュウリが投入されている。
・加工費については、「完成品（10日漬け）ベースで言うと」、95本分の手間暇がかかっている。
（仕損品になった部分は、その後は加工しない。）

原価計算

仕掛品　　度外視法

∴	完成品	70 (70)
当期投入	正仕損	10 (9)
100 (95)	末	20 (16)

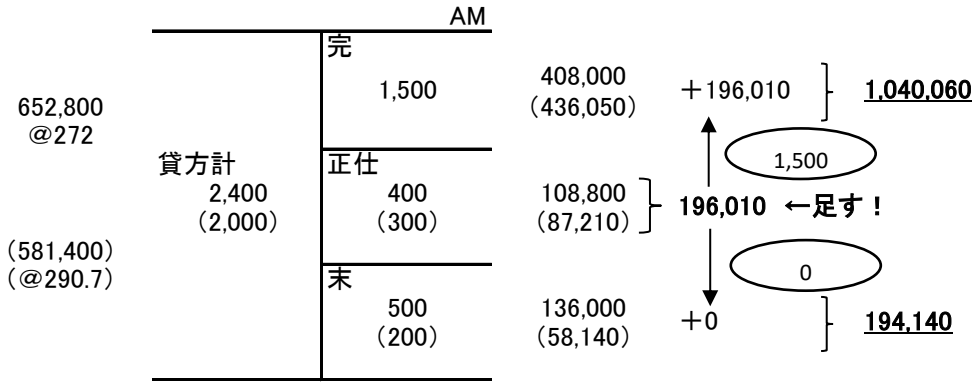
計算上の完成品 80本（79本）

・この場合、仕損品となった10本は、
10日漬けの70本だけのために犠牲となったものであると考え、
この10本分の原価を70本だけに負担させる。

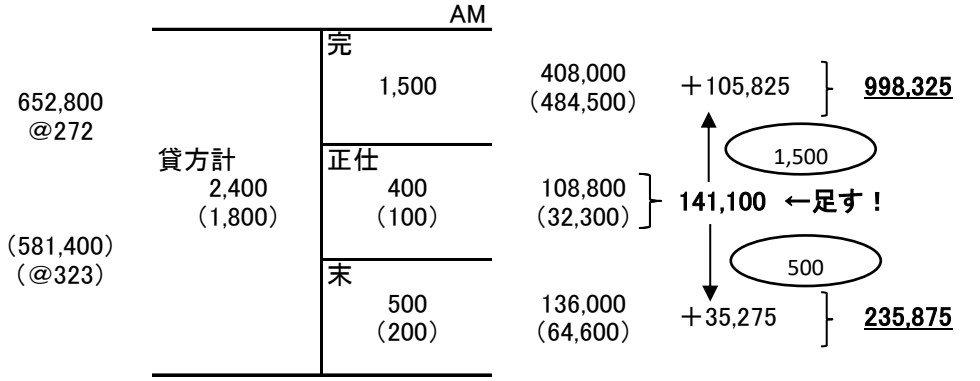
完成品のみ負担

★例題集【６－４－１】 非度外視法

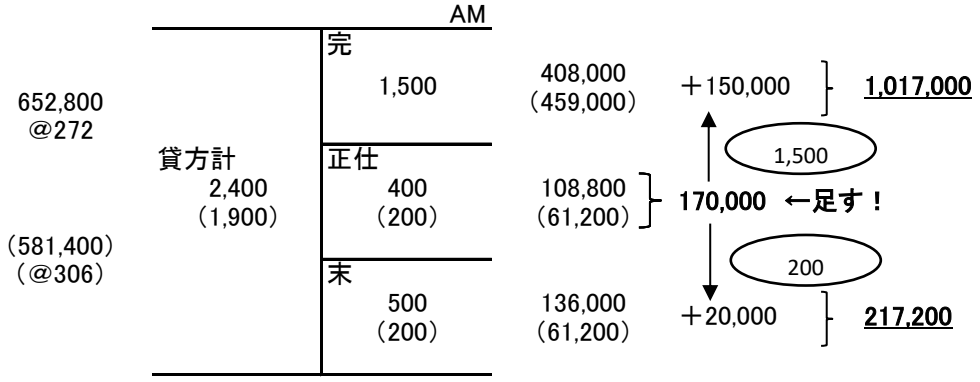
ケース１　正常仕損が工程の75%の点で発生するとき。



ケース２　正常仕損が工程の25%の点で発生するとき。



ケース３　正常仕損が工程を通じて平均的に発生するとき。



★等級別総合原価計算（第1法か第2法／第3法の見分け方）（P145～147）

	第1法	第2法または第3法
具体例	缶ビール（500ml・350ml）	Tシャツ（S・M・L）
生産データの仕掛品	等級別に区別されていない。	等級別に区別されている。
等価係数	1セットのみ。	直接材料費と加工費の2セット。

★等級別総合原価計算（第2法か第3法の見分け方・解き方）（P146～147）

	第2法	第3法
呼称	単純総合原価計算に近い方法	組別総合原価計算に近い方法
問題文の指示	右記（⇒）以外	等価係数は「**当期製造原価**を按分する際に使用する。」
考え方	「基準製品」に寄せる。「基準製品」で言えば、何kgか何個か？など。	
解き方	基準製品に寄せたうえで、単純総合原価計算を行う。	先に、直接材料費と加工費の按分先の（組別の）BOXを書く（第2段階）。 ↓ その当期投入量を等価係数を用いて換算し直し、按分計算をする（第1段階）。 ↓ その後、再度、第2段階に押し返す。

★連産品の特徴と原価按分の必要性（P151）

・不可避的に結合して生産され、原料消費量や作業時間を区分把握できないのが、連産品の特徴。
↓ したがって、
・因果関係を反映した正確な製品原価の計算は不可能。
↓ しかし、
・F/S作成の観点から、連結原価の按分は必要。
↓ したがって、
・物量法や市価法によって計算せざるをえない（P152～）。

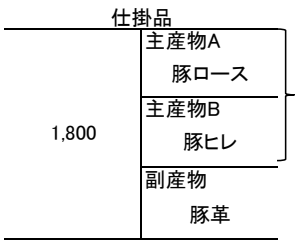
★副産物の処理（P160）

原則	副産物の価額（評価額）を総合原価から控除する。
容認	軽微な場合は、その売却収入を原価計算外の収益とすることができる。

・原則処理のうち、売却する場合、評価額は次のように算定する。

①見積売却価額 － 販管費見積額 ←副産物からは利益は発生しないという考え方

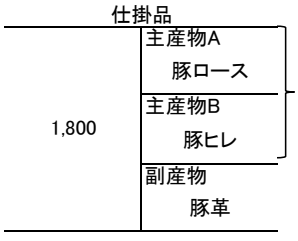
・精肉店である当工場において、豚を連産品工程に投入し、分離点までに直接材料費と加工費が1,800発生した。
・主産物として豚ロースと豚ヒレ、副産物として豚革が産出された。
・このうち、豚革は、運送費40を支払って皮革加工業者に持ち込めば、240で販売できると見込まれている。
・豚ロースと豚ヒレは当社の店頭で、合計400の販管費が発生するとともに、合計2,560で販売できると見込まれている。
・このときの主産物と副産物の予想P/Lを作成すると、右のようになる。



	主産物	副産物	全社
売上高	2,560	240	2,800
売上原価	1,600	200	1,800
売上総利益	960	40	1,000
販管費	400	40	440
営業利益	560	0	560

利益ゼロ！ ↓
全社的な営業利益率
（通常の利益率20%）

②見積売却価額 － 販管費見積額 － 通常の利益の見積額 ←副産物からも利益は発生するという考え方

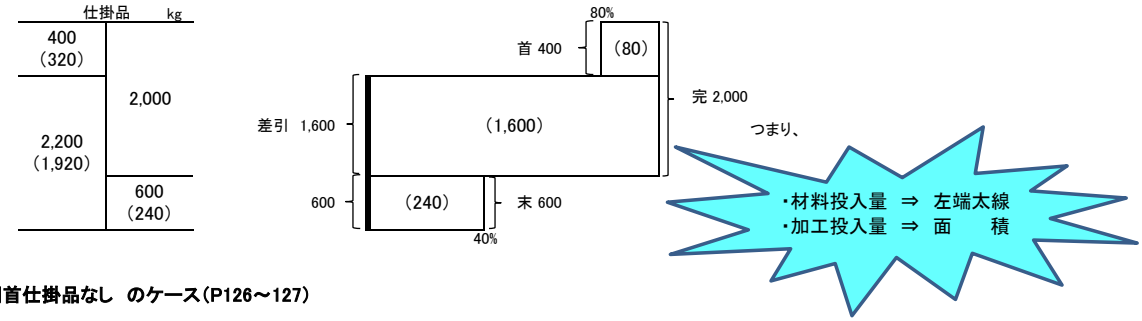


	主産物	副産物	全社
売上高	2,560	240	2,800
売上原価	1,648	152	1,800
売上総利益	912	88	1,000
販管費	400	40	440
営業利益	512	48	560
	20%	20%	20%

↓
全社的な営業利益率
（通常の利益率20%）

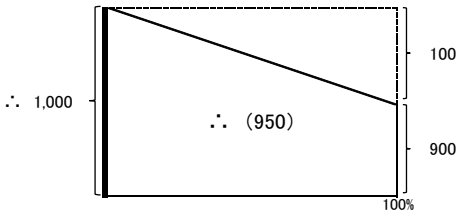
減損率が安定している場合の処理（P125～129）

★そもそも、ボックス図の意味とは？

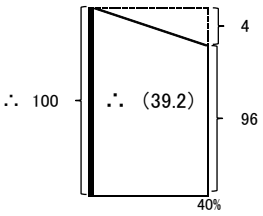


★期首仕掛品なし　のケース（P126～127）

・完成品



・期末仕掛品



(1)単価の算定

・原料費
220,000円 ÷ 1,100kg ＝ 200円／kg

・加工費
（296,760円） ÷ （989.2kg） ＝ （300円／kg）
8juju8ju9

(2)原価の計算

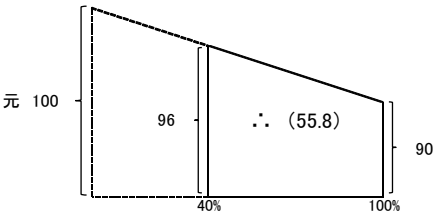
・期末仕掛品
200円／kg × 100kg ＋ （300円／kg） × （39.2kg） ＝ **31,760円**

・完成品
220,000円 ＋ 296,760円 － 31,760円 ＝ **485,000円**

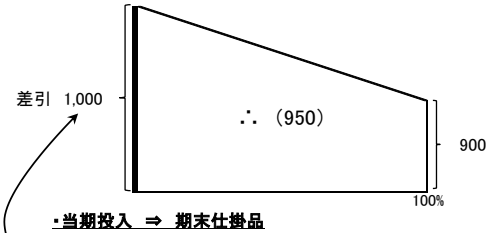
（別解）
200円／kg × 1,000kg ＋ （300円／kg） × （950kg） ＝ **485,000円**

★期首仕掛品あり　のケース（P128～129）

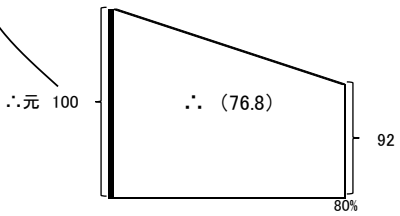
・期首仕掛品 ⇒ 完成品



・当期投入 ⇒ 完成品



・当期投入 ⇒ 期末仕掛品



(1)単価の算定

・原料費
225,500円 ÷ 1,100kg ＝ 205円／kg

・加工費
（335,606円） ÷ （1,082.6kg） ＝ （310円／kg）

(2)原価の計算

・期末仕掛品
205円／kg × 100kg ＋ （310円／kg） × （76.8kg） ＝ **44,308円**

・完成品
20,000円 ＋ 11,760円 ＋ 225,500円 ＋ 335,606円 － 44,308円 ＝ **548,558円**

（別解）
20,000円 ＋ 11,760円 ＋
205円／kg × 1,000kg ＋ （310円／kg） × （1,005.8kg） ＝ **548,558円**

問題7　当工場では等級製品ＸとＹを生産しており，等級別総合原価計算を実施している。次の〔資料〕に基づき，製品Ｘの完成品原価として正しい金額を示す番号を一つ選びなさい。

〔資料〕

1．生産データ

	製品Ｘ	製品Ｙ
月初仕掛品	200個（0.1）	100個（0.6）
当月投入	5,000個	4,500個
正常仕損品	300個（0.5）	200個（0.4）
異常仕損品	200個（0.25）	—
月末仕掛品	400個（0.8）	400個（0.2）
完成品	4,300個	4,000個

（　）内は加工進捗度を示している。

2．原価データ

	製品Ｘ	製品Ｙ
月初仕掛品原価		
直接材料費	88,400円	35,000円
加工費	18,500円	33,120円
当月製造費用		
直接材料費	3,792,600円	
加工費	6,679,200円	

3．等価係数

	製品Ｘ	製品Ｙ
直接材料費	1.0	0.8
加工費	1.0	0.6

4．その他の計算条件

(1) 材料はすべて工程の始点で投入している。

(2) 仕掛品の評価は先入先出法による。

(3) 正常仕損費の計算は度外視法によるものとし，その処理は，仕損品の発生時点と仕掛品の進捗度により判断する。

(4) 仕損品はすべて当月投入分から発生し，その売却可能価額は製品Ｘについては総額24,300円，製品Ｙについては総額16,200円であり，直接材料費から控除する。なお異常仕損品に関しては，売却価値はないものとする。

(5) 等級別計算は，当月製造費用を等価係数によって各製品に按分する方法による。

(6) 計算過程で端数が生じる場合は，円未満を四捨五入する。

1．6,077,240円　　2．6,076,733円　　3．6,079,400円

4．6,101,540円　　5．6,200,400円

平成22年第Ⅱ回短答式管理会計論

4-1

問題8　当工場は第1工程で連産品A，B，Cを生産している。さらに，AはX工程で，BはY工程で，CはZ工程で追加加工することにより完成し，製品A，B，Cとして外部に販売している。次の〔資料〕に基づき，第1工程の連結原価を連産品Cに按分する際に，分離点における正常市価を基準として按分した金額と，すべての製品の売上高総利益率を等しくするように按分した金額との差額として正しい番号を一つ選びなさい。なお，計算過程で端数が生じる場合は，円未満を四捨五入する。

〔資料〕

1．原価・生産データ

第1工程

連結原価　18,468,400円

連産品A　2,200kg　　連産品B　1,875kg　　連産品C　1,400kg

X工程

正常追加加工費　4,701,500円　　実際追加加工費　4,748,860円

Y工程

正常追加加工費　4,023,500円　　実際追加加工費　4,064,600円

なおY工程においては，投入量の4%の正常減損が発生する。

Z工程

正常追加加工費　3,715,000円　　実際追加加工費　3,985,940円

2．価格データ

	製品A	製品B	製品C
正常市価	8,400円	6,200円	4,500円

1．143,840円　　2．328,524円　　3．358,406円

4．418,140円　　5．1,534,366円

平成22年第Ⅱ回短答式管理会計論

4-2

問題9　次のア～カの記述のうち正しいものが二つある。その記号の組合せを示す番号を一つ選びなさい。

ア．総合原価計算において仕損品が生じる場合に，この発生額が軽微であるなら，通常の処理方法ではなく，これを売却して得た収入を原価計算外の収益とすることも「原価計算基準」で認められている。

イ．純粋先入先出法により完成品の単位原価を算定すると，当月作業と前月作業による原価を識別することができるので，修正先入先出法に比べて価格決定目的に有効な資料を得ることができる。

ウ．正常仕損費の処理を，仕損品の発生時点と仕掛品の進捗度により判断するケースにおいて，仕損が発生する進捗度が期末仕掛品の進捗度より高い場合は，度外視法で計算しても，非度外視法によっても，期末仕掛品原価の金額は等しくなる。

エ．実務上，期末仕掛品の数量が毎期ほぼ等しい場合には，総合原価の計算上これを無視し，当期製造費用を完成品原価とすることも見受けられるが，この処理方法は「原価計算基準」では認められていない。

オ．加工費工程別総合原価計算とは，工程別計算において最終完成品が負担する各加工費を直接に計算し，これらを合計して完成品加工費を計算する方法である。

カ．連産品と等級製品は同一工程から同種製品が連続生産される点は類似しているが，等級製品は別個に生産することが可能であるのに対して，連産品は複数の製品が必然的に生産される点で異なっている。

1．アウ　　2．アエ　　3．イウ　　4．エオ　　5．オカ

平成22年第Ⅱ回短答式管理会計論

平成22年第Ⅱ回短答式管理会計論

4-3

平成23年第Ⅰ回短答式管理会計論

問題6　当工場では製品Zを連続する二つの製造工程において生産し，累加法による工程別総合原価計算を実施している。第1工程の始点でA材料を投入し，これを加工し完成させて，全量を第2工程に振替える。そして第2工程で前工程完了品に対して加工を行なうが，加工工程の進捗度60%の時点から完成までB材料を平均的に追加投入し，完成品を産出する。なお，これにより生産量の増量はない。次の〔資料〕に基づき，非度外視法により算定した第2工程の完成品原価として，正しい金額を示す番号を一つ選びなさい。なお，計算過程で端数が生じる場合は，円未満を四捨五入する。

〔資料〕

1．生産データ

	第1工程	第2工程
月初仕掛品	300個(0.5)	200個(0.4)
当月投入	2,100個	2,000個
正常仕損品	—	200個(0.5)
月末仕掛品	400個(0.4)	500個(0.8)
完成品	2,000個	1,500個

（　）内は加工進捗度を示している。

2．原価データ

	第1工程	第2工程
月初仕掛品原価		
A材料費	156,600円	—
前工程費	—	232,400円
加工費	96,600円	51,200円
当月製造費用		
A材料費	1,092,000円	—
B材料費	—	840,000円
加工費	1,286,400円	1,223,040円

3．計算条件

(1) 仕掛品評価の方法は先入先出法による。

(2) 仕損品はすべて当月投入分から発生し，10個当たり175円で売却可能であり，前工程費から控除する。

(3) 仕損費の処理は，仕損品の発生時点と仕掛品の進捗度により判断する。

1．3,538,040円　　2．3,628,040円　　3．3,630,568円

4．3,631,734円　　5．3,636,160円

平成23年第Ⅰ回短答式管理会計論

平成23年第Ⅰ回短答式管理会計論

4-4

問題 7　当工場では，等級製品ＸとＹを生産し，実際等級別総合原価計算を採用している。次の〔資料〕に基づき，等級製品Ｙの原料費と加工費の等価係数（　？　）の正しい組合せを示す番号を一つ選びなさい。なお，計算過程で端数が生じた場合は円未満を四捨五入する。

〔資料〕

1. 生産データ　（単位：個）

	製品Ｘ	製品Ｙ
月初仕掛品	10,000(1/4)	5,000(3/4)
当月投入	90,000	70,000
投入合計	100,000	75,000
正常仕損品	250	—
月末仕掛品	12,250(1/2)	10,000(1/5)
完成品	87,500	65,000
産出合計	100,000	75,000

（　）内は加工進捗度を示している。

2. 等価係数

	製品Ｘ	製品Ｙ
原料費	1	（　？　）
加工費	1	（　？　）

3. 原価データ　（単位：円）

	製品Ｘ	製品Ｙ	合計
月初仕掛品			
原料費	623,750	246,000	869,750
加工費	107,500	129,000	236,500
小計	731,250	375,000	1,106,250
当月製造費用			
原料費	—	—	（各自計算）
加工費	—	—	（各自計算）
完成品			
原料費	4,900,000	2,886,000	7,786,000
加工費	3,517,500	1,599,000	5,116,500
合計	8,417,500	4,485,000	12,902,500

4-50

4. 計算条件

(1) 原料は工程始点にて投入されている。また，出来るだけ正確に等級製品の製造原価を把握するために，等価係数は原料費と加工費に区分して，当月製造費用を等級製品に按分する際に使用している。

(2) 完成品と月末仕掛品への製造費用の配分は先入先出法による。

(3) 正常仕損は工程の終点で発生し，仕損品の処分価額はない。

	1.	2.	3.	4.	5.
原料費	0.7	0.7	0.8	0.8	0.8
加工費	0.6	0.65	0.6	0.65	0.7

平成23年第Ⅱ回短答式管理会計論

4-5②

問題 6　当工場では単一の製品を生産している。次の〔資料〕に基づき，当月の完成品原価として正しい金額を示す番号を一つ選びなさい。

〔資料〕

1. 生産データ

月初仕掛品	100 kg	(0.4)
当月投入	10,000 kg	
正常仕損品	50 kg	
月末仕掛品	200 kg	(0.8)
副産物	50 kg	
当月完成品	9,800 kg	

( )内は加工進捗度を示している。

2. 原価データ

	原料費	加工費
月初仕掛品	1,000 千円	800 千円
当月製造費用	原料A 126,400 千円 原料B 299,400 千円	220,000 千円

3. 計算条件

(1) 原料Aはすべて工程の始点で投入している。原料Bは工程の進捗度 50 %の時点から終点まで平均的に追加投入している。なお追加投入による生産量の増量はない。

(2) 仕掛品の評価方法は先入先出法による。

(3) 正常仕損費の計算は非度外視法によるものとし，その処理は仕損品の発生時点と仕掛品の進捗度により判断する。

(4) 仕損品はすべて正常なもので，当月投入分のみから発生し加工進捗度 60 %の時点で発生している。その売却価値はない。

(5) 副産物はすべて工程の終点で発生する。副産物の見積売却価額は 5 千円／kg であり，その処理は与えられた計算の条件の中で理論的に判断すること。なお，この副産物は軽微な副産物に該当しない。

(6) 計算過程で端数が生じる場合は千円未満を四捨五入すること。

1. 630,240 千円　　2. 631,550 千円　　3. 636,360 千円
4. 637,670 千円　　5. 637,920 千円

問題 7　当工場は，工程の始点で一定量の原料Xを投入してバッチ生産を行い，実際総合原価計算を採用している。次の〔資料〕に基づき，完成品総合原価として正しい金額を示す番号を一つ選びなさい。

〔資料〕

1. 生産データ

	第1バッチ	第2バッチ	第3バッチ
当月原料投入量	1,000 kg	2,000 kg	1,500 kg

	産出量	備考
完成品	2,700 kg	第1バッチ，第2バッチ
正常減損	?	第1バッチ，第2バッチ 第3バッチ
月末仕掛品	?	第3バッチ(加工進捗度は40％)
計	4,500 kg	

2. 原価データ

原料費	1,035,000 円
加工費	859,500 円

3. 計算条件など

(1) 月初仕掛品はないものとする。

(2) 正常減損は加工の進捗に応じて発生し，工程の終点では，原料の始点投入量の10％にまで達するものとする。なお，正常減損費の処理は非度外視法による。

(3) ?の部分は各自計算しなさい。

(4) 計算過程で端数が生じる場合は円未満を四捨五入しなさい。

1. 1,296,000 円
2. 1,304,250 円
3. 1,402,500 円
4. 1,406,250 円
5. 1,419,300 円

平成24年第Ⅱ回短答式管理会計論

問題 6　当工場では，単一製品を連続する2つの製造工程において生産し，累加法による工程別総合原価計算を実施している。第1工程の始点で原料を投入し，これを加工し完成させて，全量を第2工程に振り替えた後，さらに加工進捗度50％の時点で原料を追加投入し加工を行い製品を生産している。次の〔資料〕に基づき，第2工程の完成品原価として正しい金額を示す番号を一つ選びなさい。

〔資料〕

1. 生産データ

	第1工程	第2工程
月初仕掛品	—	240 kg　(0.3)
当月投入	3,000 kg	3,060 kg
正常減損	40 kg	—
月末仕掛品	200 kg　(0.25)	627 kg　(0.8)
当月完成品	各自計算	各自計算

(注) (1)　(　)内は加工進捗度を示している。

(2)　第2工程において追加投入された原料分だけ生産量は増加する。

2. 原価データ

	第1工程	第2工程
月初仕掛品		
前工程費	—	480,000 円
加工費	—	14,400 円
当月製造費用		
前工程費	—	各自計算
原料費	4,215,000 円	375,000 円
加工費	1,590,460 円	703,500 円

3. 計算条件

(1)　仕掛品の評価は先入先出法による。

(2)　正常減損は第1工程を通じ平均的に発生したものとし，正常減損費は非度外視法により当月完成品と月末仕掛品に負担させる。

(3)　第2工程の加工費計算では，完成品換算量の計算において追加投入原料による増量分を考慮しない。

(4)　計算過程で端数が生じる場合は円未満を四捨五入する。

1. 5,444,190 円　　2. 5,678,386 円　　3. 5,745,720 円

4. 5,747,940 円　　5. 5,819,190 円

問題 8　当工場では，当月より組製品Ａ・Ｂ・Ｃを生産している。組製品Ａには大きさの異なる二つの製品Ａ１・Ａ２があり，製品Ａ１・Ａ２について等級別総合原価計算を実施している。次の〔資料〕に基づき，等級製品Ａ２の完成品総合原価として正しい金額を示す番号を一つ選びなさい。

〔資料〕

1. 組製品データ

組製品	直接材料費	直接労務費	製造間接費
A	1,325,000 円	各自計算	300,000 円
B	3,500,000 円	各自計算	450,000 円
C	2,576,800 円	各自計算	600,000 円

(注) (1) 組製品Ａ・Ｂ・Ｃの直接作業時間合計は，4,500 時間である。
(2) 直接工賃率は１時間当たり 2,816 円である。

2. 等級製品の生産データ

	製品Ａ１	製品Ａ２
当月投入	2,000 個	3,000 個
正常仕損品	50 個 (0.5)	70 個 (0.4)
月末仕掛品	300 個 (0.6)	100 個 (0.6)
当月完成品	各自計算	各自計算

(注) (1) ( )内は加工進捗度を示している。
(2) 正常仕損は( )内に示された進捗度の点で発生する。

3. 等価係数

	製品Ａ１	製品Ａ２
直接材料費	1	1.1
加　工　費	1	1.5

4. 計算条件

(1) 直接材料費と直接労務費が組直接費，製造間接費が組間接費である。組間接費の組別配賦は，直接作業時間を配賦基準として行う。
(2) 直接材料はすべて工程の始点で投入している。
(3) 正常仕損費の計算は非度外視法によるものとし，その処理は仕損品の発生時点と仕掛品の進捗度により判断する。仕損品の評価額はゼロである。
(4) 等級別総合原価計算は，当月製造費用を等価係数を用いて等級製品に按分する方法による。
(5) 計算過程で端数が生じる場合は円未満を四捨五入する。

1. 2,657,978 円　　2. 2,838,346 円　　3. 2,939,626 円
4. 2,940,028 円　　5. 2,974,010 円

問題 5　総合原価計算に関する次のア～エの記述のうちには，正しいものが二つある。その記号の組合せの番号を一つ選びなさい。

ア．わが国の「原価計算基準」によると，等級別総合原価計算では，各等級製品について適当な等価係数を定め，一期間における完成品の総合原価ではなく，一期間の製造費用を等価係数に基づき各等級製品にあん分してその製品原価を計算する。

イ．わが国の「原価計算基準」によると，組別総合原価計算では，まず，一期間の製造費用を組直接費と組間接費または原料費と加工費とに分け，個別原価計算に準じて，組直接費または原料費は，各組の製品に賦課し，組間接費または加工費は，適当な配賦基準により各組に配賦する。次いで，組別の製造費用と期首仕掛品原価に基づいて単純総合原価計算を行う。

ウ．実務上，総合原価計算において，加工費について期末仕掛品の完成品換算量を計算することが困難な場合，期末仕掛品を直接材料費だけで計算することが見受けられるが，この処理方法はわが国の「原価計算基準」では認められていない。

エ．実務上，連産品のうち一部の製品を副産物に準じて計算し，これを一期間の総合原価から控除した金額をもって，他の連産品の価額とすることが見受けられるが，この処理方法はわが国の「原価計算基準」でも認められている。

1．アイ　　2．アウ　　3．アエ　　4．イウ　　5．イエ

平成25年第Ⅱ回短答式管理会計論

4-10

問題 7　当工場では，製品ＡとＢを含む複数の製品を製造し，総合原価計算を実施している。製品ＡとＢの原料はすべて製造工程の始点で投入し，製品Ａは，さらに製造工程の終点で製品Ｂを材料として追加投入し完成品となる。製品Ｂの追加投入に伴い，製品Ａの完成品量は1.1倍になる。製品Ａの製造工程で発生する副産物は，製品Ｂの追加投入の直前で分離される。次の〔**資料**〕に基づき，製品Ａの当月完成品原価として適切な番号を一つ選びなさい。

〔**資料**〕

1. 当月生産データ

	製　品　A	製　品　B
月　初　仕　掛　品	—	125 kg　(0.8)
当　月　原　料　投　入	2,500 kg	465 kg
当　月　製　品　B　投　入	各自計算	—
正　常　仕　損　品	100 kg　(0.5)	—
異　常　仕　損　品	—	20 kg　(0.2)
副　産　物	150 kg	—
月　末　仕　掛　品	400 kg　(0.7)	70 kg　(0.3)
完　成　品	各自計算	各自計算

(注)　①　(　)内は加工進捗度を示している。

②　正常仕損及び異常仕損は(　)内に示された加工進捗度の点で発生する。

2. 当月原価データ

		製　品　A	製　品　B
月　初 仕掛品	原　料　費	—	38,500円
	加　工　費	—	80,500円
当　月 投　入	原　料　費	1,750,000円	139,500円
	加　工　費	各自計算	各自計算
	材料(製品Ｂ)費	各自計算	—

3. その他

(1)　製品単位当たり当月実際直接作業時間は，製品Ａが0.2時間／kg，製品Ｂが0.4時間／kgである。

(2)　直接労務費の当月実際賃率は1,200円／時間である。

(3)　製造間接費は直接作業時間を基準として予定配賦を行う。当年度の予定直接作業時間は18,000時間，製造間接費予算は14,400,000円である。

(4)　仕損の処理は非度外視法による。仕損品の評価額はゼロである。

4-11①

(5) 仕掛品の評価は先入先出法を採用している。

(6) 副産物はそのまま外部に売却可能で，見積売却価格は 800 円／kg，見積販売費及び一般管理費は 290 円／kg である。副産物の評価額は軽微なものではない。

(7) 計算過程で端数が生じる場合は，円未満を四捨五入する。

1. 2,398,500 円　　2. 2,402,555 円　　3. 2,403,555 円
4. 2,404,055 円　　5. 2,479,055 円

平成25年第Ⅱ回短答式管理会計論

4-11②

問題 6　当工場は複数製品を生産している。製品Ａは工程の始点で原料αを投入しこれを加工し完成品となる。当月より生産を開始した製品Ｂは，当月に完成した製品Ａのうち半分の量に対して，同量の原料βを追加投入しこれを加工し完成品となる。

製品Ｂに関し原価計算上は，製品Ａを生産する工程（これをＡ工程という）と製品Ｂ生産のための追加工程（これを追加工程という）の２つの工程を認識し，累加法による工程別総合原価計算を実施している。次の〔資料〕に基づき，製品Ｂの単位当たり完成品原価として正しい金額を示す番号を一つ選びなさい。（６点）

〔資料〕

1. 当月生産データ

	Ａ工程	追加工程
月初仕掛品	780 kg　(10 %)	—
当月原料投入	各自計算	各自計算
当月製品Ａ投入	—	各自計算
正常減損	80 kg	—
正常仕損品	—	180 kg
月末仕掛品	800 kg　(10 %)	700 kg　(20 %)
完成品	1,880 kg	1,000 kg

（注）　原料と製品Ａは，各工程の始点で投入され，（　）内は加工費進捗度を示している。

2. 当月原価データ

(1)　一部抜粋データ

		Ａ工程	追加工程
月初仕掛品		572,500 円	—
当月製造費用	前工程費	—	各自計算
	原料費	1,188,000 円	466,500 円

(2)　実際直接作業時間は，Ａ工程が 961 時間であり，追加工程が 132 時間である。

(3)　直接労務費の予定賃率は 2,000 円／時間である。

(4)　製造間接費は直接作業時間を基準として予定配賦を行う。当年度の予定直接作業時間は 30,000 時間，製造間接費予算は 15,000,000 円である。

4-12①

3. 計算条件

(1) 仕掛品の評価は先入先出法による。

(2) 正常仕損は工程の終点で発生しており，仕損品の評価額はゼロである。

(3) 正常減損は，当月投入分のみから生じＡ工程を通じ平均的に発生したものとする。正常減損費は非度外視法により完成品と月末仕掛品に負担させる。なお，完成品への負担計算では，月初仕掛分と当月投入分を区分しないものとする。

(4) 計算過程で端数が生じる場合は，円未満を四捨五入する。

1. 1,696円　　2. 1,703円　　3. 1,711円

4. 1,719円　　5. 1,727円

平成26年第Ⅱ回短答式管理会計論

4-12②

問題 6　下記のア～エの記述のうち，わが国の「原価計算基準」に基づいて正しいものの組合せを示す番号を一つ選びなさい。（5点）

ア．等級製品の原価計算に採用される等価係数は，価値移転的原価計算からの観点から，製造原価発生と関係のある何らかの基準によるものと，市価の高い製品にはそれだけ多くの製造原価を負担させるという負担能力主義に基づく正常市価基準によるものが認められる。

イ．同一工程から生産される複数製品が連産品の場合，総合原価は，生産量などの物量尺度を用いて測定した，分離点における連産品の割合に基づいてあん分される。分離点以降固有の原価の発生が無く連産品の販売価格が異なる場合，連産品ごとの売上総利益率は異なることとなる。

ウ．同一工程から生産される複数製品が連産品の場合，総合原価は，分離点における連産品の正常市価に数量を乗じた金額に基づいてあん分される。分離点以降固有の原価の発生が無く連産品の販売価格が異なる場合，連産品ごとの売上総利益率は同率になる。

エ．主産物の製造過程から副産物が生じる場合，一期間の総合原価は副産物にあん分することなく，算定された副産物の価額を控除して主産物の総合原価となる。ただし，副産物が軽微な場合は，当該副産物を売却して得た収入を原価計算外の収益とすることができる。

1．アイ　　2．アウ　　3．アエ　　4．イウ　　5．イエ　　6．ウエ

平成27年第Ⅰ回短答式管理会計論

4-13

問題 5　当工場では連続する二つの製造工程において製品Xを生産し，累加法による工程別総合原価計算を実施している。第一工程の始点でA材料を投入し，これを加工し完成させ全量を第二工程に振り替えている。第二工程では，工程の始点で第一工程の完成品を，さらに工程の終点でB材料を投入して完成品を産出する。なお，この追加材料の投入による生産量の増加はない。

下記の〔資料〕に基づいて，第二工程の完成品総合原価として正しい金額を示す番号を一つ選びなさい。（8点）

〔資料〕

1．生産データ

	第一工程	第二工程
月初仕掛品	300個(2／5)	200個(2／5)
当月投入	2,850個	2,300個
正常仕損品	100個(1／5)	100個(3／5)
異常仕損品	50個(3／5)	—
月末仕掛品	700個(2／7)	300個(4／5)
完成品	2,300個	2,100個

(注1)　(　)内は加工費進捗度を示している。

(注2)　正常仕損および異常仕損は(　)内に示された加工費進捗度の点で発生する。

2．原価データ

	第一工程	第二工程
月初仕掛品原価		
前工程費	—	1,570,000円
A材料費	402,000円	—
B材料費	—	0円
加工費	817,200円	475,800円
当月製造費用		
A材料費	6,003,000円	—
B材料費	—	248,000円
加工費	9,302,800円	4,672,200円

4-14①

3. 計算条件

(1) 仕掛品の評価は平均法を採用している。

(2) 第一工程と第二工程で発生する仕損品の評価額はゼロである。

(3) 正常仕損の処理は度外視法を採用している。

(4) 計算過程で端数が生じる場合は円未満を四捨五入する。

1. 18,270,000円　　2. 18,518,000円　　3. 18,589,795円

4. 18,598,000円　　5. 18,685,038円

平成28年第Ⅰ回短答式管理会計論

4-14②

この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

問題 7　正解 3　難易度 A

【本問のポイント】

等級別総合原価計算からの出題である。正常仕損費の負担先および仕損品評価額の処理に注意しつつ，慎重に資料を読み確実に得点していただきたい。また，〔資料〕4.(5)から，ＴＡＣでいうところの第３法であることが読み取れる。

「当月製造費用を等価係数によって各製品に按分する」⇒組別総合原価計算に近い方法（P147, 142）

【解　説】 P150

1．当月製造費用の按分 ←第1段階は「度外視」しない！（各製品組へのインプット原価を確定するための手続だから）

(1) 直接材料費

製品Ｘ

月初仕掛品 200個	完成品 4,300個
当月投入 5,000個	
	正常仕損品 300個
2,205,000円	異常仕損品 200個
	月末仕掛品 400個

第3法 ⇒「押し返す解き方」

積数合計 8,600個	製品Ｘ 5,000個
3,792,600円	2,205,000円
(@441円)	製品Ｙ*) 3,600個
	1,587,600円

×1.0

×0.8

製品Ｙ

月初仕掛品 100個	完成品 4,000個
当月投入 4,500個	
1,587,600円	正常仕損品 200個
	月末仕掛品 400個

*) 製品Ｙ当月投入4,500個×等価係数0.8

(2) 加工費

製品Ｘ

月初仕掛品 20個	完成品 4,300個
当月投入 4,800個	
	正常仕損品 150個
4,416,000円	異常仕損品 50個
	月末仕掛品 320個

積数合計 7,260個	製品Ｘ 4,800個
6,679,200円	4,416,000円
(@920円)	製品Ｙ*) 2,460個
	2,263,200円

×1.0

×0.6

製品Ｙ

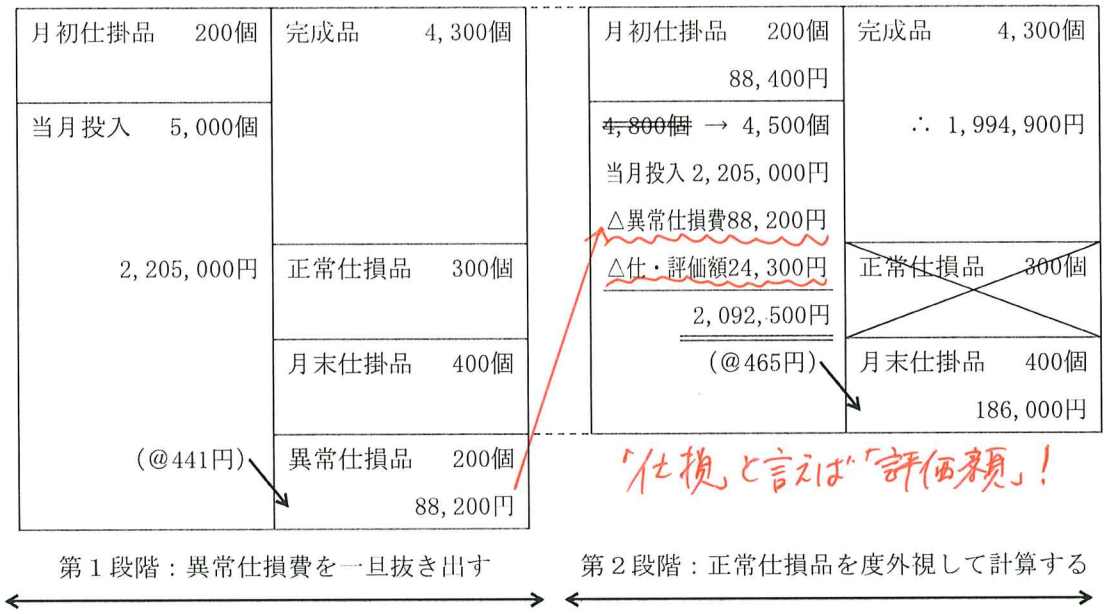
月初仕掛品 60個	完成品 4,000個
当月投入 4,100個	
2,263,200円	正常仕損品 80個
	月末仕掛品 80個

*) 製品Ｙ当月投入4,100個×等価係数0.6

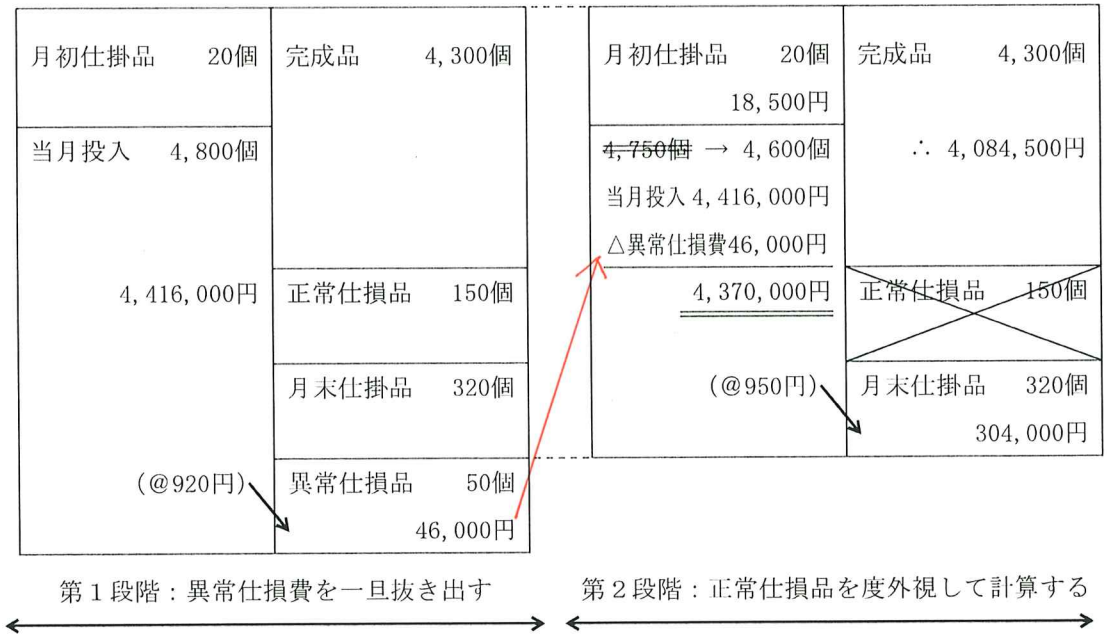
この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

資料4.(3)より、P131 ©のパターンであることを読み取る。

２．製品Ｘの直接材料費の計算



３．製品Ｘの加工費の計算



４．製品Ｘの完成品原価

直接材料費1,994,900円＋加工費4,084,500円＝**6,079,400円**

よって，正解は３である。

4-1②

この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

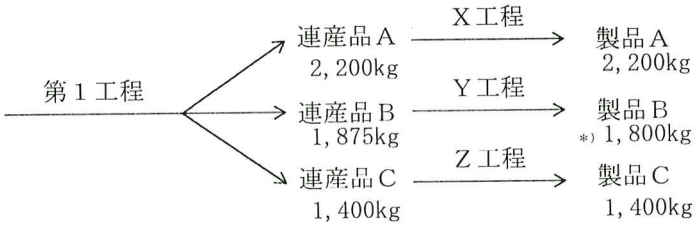
問題 8　正解 2　難易度 B

【本問のポイント】

連産品の原価計算からの出題である。分離点における正常市価を基準として按分する方法（ＮＲＶ法）およびすべての製品の売上高総利益率を等しく按分する方法（修正ＮＲＶ法）の計算方法の違いを理解していれば，正答できるであろう。

【解　説】

本問の生産状況を示すと，以下のとおりである。　面倒くさがらずに、整理図を書こう！



*) 連産品Ｂ1, 875kg×（１－正常減損率４％）

１．ＮＲＶ法　P153

「按分には当月の突発的事情は影響させない」という考え方。

〔**資料**〕において，正常追加加工費と実際追加加工費が与えられているが，連結原価の按分にあたっては，正常追加加工費を用いる点に注意する。なお，修正ＮＲＶ法においても同様である。

連結原価

合計　23, 500, 000円 18, 468, 400円 (@0. 78…円)	Ａ　*1) 13, 778, 500円	⇒　Ｘ工程へ
	Ｂ　*2) 7, 136, 500円	⇒　Ｙ工程へ
	Ｃ　*3) 2, 585, 000円 2, 031, 524円	⇒　Ｚ工程へ

連結原価の負担能力を算定している。
↓
「価値回収的原価計算」P159

*1) 正常市価8, 400円×生産量2, 200kg－正常追加加工費4, 701, 500円
*2) 正常市価6, 200円×生産量1, 800kg－正常追加加工費4, 023, 500円
*3) 正常市価4, 500円×生産量1, 400kg－正常追加加工費3, 715, 000円

「販売量」ではない！
（按分には当月に売れ残ったかどうかは関係ないから）

この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

２．修正ＮＲＶ法 P154~155

(1) 全体の売上総利益率の計算 すべて売り切った場合の利益率(原価率)

	製品Ａ	製品Ｂ	製品Ｃ	合　計
売上高	＊1) 18,480,000円	11,160,000円	6,300,000円	35,940,000円
連結原価	?	?		18,468,400円
正常追加加工費	4,701,500円	4,023,500円	3,715,000円	12,440,000円
原価合計	?	?	?	30,908,400円
売上総利益	?	?	?	5,031,600円
売上総利益率	?	?	?	＊2) 0.14

＊1) 正常市価8,400円×生産量2,200kg

＊2) 売上総利益合計5,031,600円÷売上高合計35,940,000円

(2) 各連産品の原価合計の計算

ここからは，解答上必要な製品Ｃのみを計算する。

	製品Ｃ
売上高	6,300,000円
連結原価	?
正常追加加工費	3,715,000円
原価合計	＊2) 5,418,000円
売上総利益	＊1) 882,000円
売上総利益率	0.14

＊1) 売上高6,300,000円×売上総利益率14％

＊2) 売上高6,300,000円－売上総利益882,000円

(3) 連結原価配分額の計算

やはり，「価値回収的原価計算」

	製品Ｃ
売上高	6,300,000円
連結原価	＊) 1,703,000円
正常追加加工費	3,715,000円
原価合計	5,418,000円
売上総利益	882,000円
売上総利益率	0.14

＊) 原価合計5,418,000円－正常追加加工費3,715,000円

３．按分原価の差額の計算

ＮＲＶ法2,031,524円－修正ＮＲＶ法1,703,000円＝**328,524円**

よって，正解は２である。

4-2 ②

この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

問題 9　正解 1　難易度 A

【本問のポイント】

総合原価計算全般についての出題である。「原価計算基準」に関する知識も必要である。

【解　説】

ア．**正しい。**　総合原価計算において，副産物が生ずる場合には，その価額を算定して，これを主産物の総合原価から控除する。

軽微な副産物は，前項の手続によらないで，これを売却して得た収入を，原価計算外の収益とすることができる。

作業くず，仕損品等の処理および評価は，副産物に準ずる。（基準28）

イ．**誤　り。**　確かに，純粋先入先出法により完成品の単位原価を算定すると，当月作業と前月作業による原価を識別することができる。しかし，価格決定目的からすると，月ごとの単位原価の変動は小さい方が望ましく，したがって，期首仕掛品完成分と当期投入完成分を平均して単位原価を算定する修正先入先出法の方が有効な資料を得ることができる。

ウ．**正しい。**　この場合は，度外視法でも非度外視法でも，正常仕損費を完成品のみに負担させることになり，期末仕掛品原価の金額は等しくなる。

エ．**誤　り。**　期末仕掛品の数量が毎期ほぼ等しい場合には，総合原価の計算上これを無視し，当期製造費用をもってそのまま完成品総合原価とすることができる。（基準24(2)6）

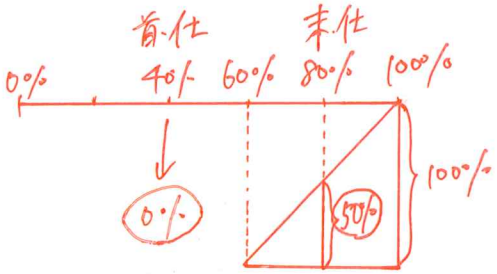
オ．**誤　り。**　原料がすべて最初の工程の始点で投入され，その後の工程では，単にこれを加工するにすぎない場合には，各工程別に一期間の加工費を集計し，それに原料費を加算することにより，完成品総合原価を計算する。この方法を加工費工程別総合原価計算（加工費法）という。（基準26）

カ．**誤　り。**　連産品とは，同一工程において同一原料から生産される異種の製品である。（基準29）

よって，正解は１である。

㊟整理図（B材料のコスト・ビヘイビア）

この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。



問題6　正解　2　　難易度　B

【出題内容】

工程別総合原価計算（非度外視法，追加材料の投入）

【解　説】

1．第１工程から第２工程までの原価配分

第一工程

A材料費

月初　300個 156, 600円	完成　2, 000個 1, 040, 600円 （差額）
当月　2, 100個 1, 092, 000円 （@520円）	月末　400個 208, 000円

第１工程加工費

月初　150個 96, 600円	完成　2, 000個 1, 280, 600円 （差額）
当月　2, 010個 1, 286, 400円 （@640円）	月末　160個 102, 400円

前工程費

月初　200個 232, 400円	完成　1, 500個 1, 741, 180円 （差額）
当月　2, 000個 2, 321, 200円 （@1, 160. 6円）	正仕　200個 232, 120円
	月末　500個 580, 300円

第２工程加工費

月初　80個 51, 200円	完成　1, 500個 955, 740円 （差額）
当月　1, 920個 1, 223, 040円 （@637円）	正仕　100個 63, 700円
	月末　400個 254, 800円

B材料費

当月　1, 750個 840, 000円 （@480円）	完成　1, 500個 720, 000円
	月末　*) 250個 120, 000円

第２工程

㊟

*)　月末仕掛品量500個×$\frac{80\%-60\%}{100\%-60\%}$

2．第２工程の正常仕損費の配分

正常仕損品の発生時点(50%)＜月末仕掛品の進捗度(80%)より，両者負担と判断する。

正常仕損費

合計　1, 800個 *2) 292, 320円 （@162. 4円）	完成　*1) 1, 300個 211, 120円
	月末　500個 81, 200円

*1)　完成品量1, 500個－月初仕掛品量200個

*2)　前工程費232, 120円－評価額*3) 3, 500円＋加工費63, 700円

*3)　評価額(175円÷10個)×正常仕損量200個

「仕損」と言えば「評価額」！

P116 非度外視法では分離把握した正常仕損費を合算したものを追加配賦する！

3．第２工程の完成品原価の計算

前工程費1, 741, 180円＋加工費955, 740円＋Ｂ材料費720, 000円＋正/仕211, 120円＝**3, 628, 040円**

以上より，正解は２となる。

この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

問題 7　正解 3　難易度 B

第3法(P147)の「押し返す解法」をよく理解しよう。

【出題内容】

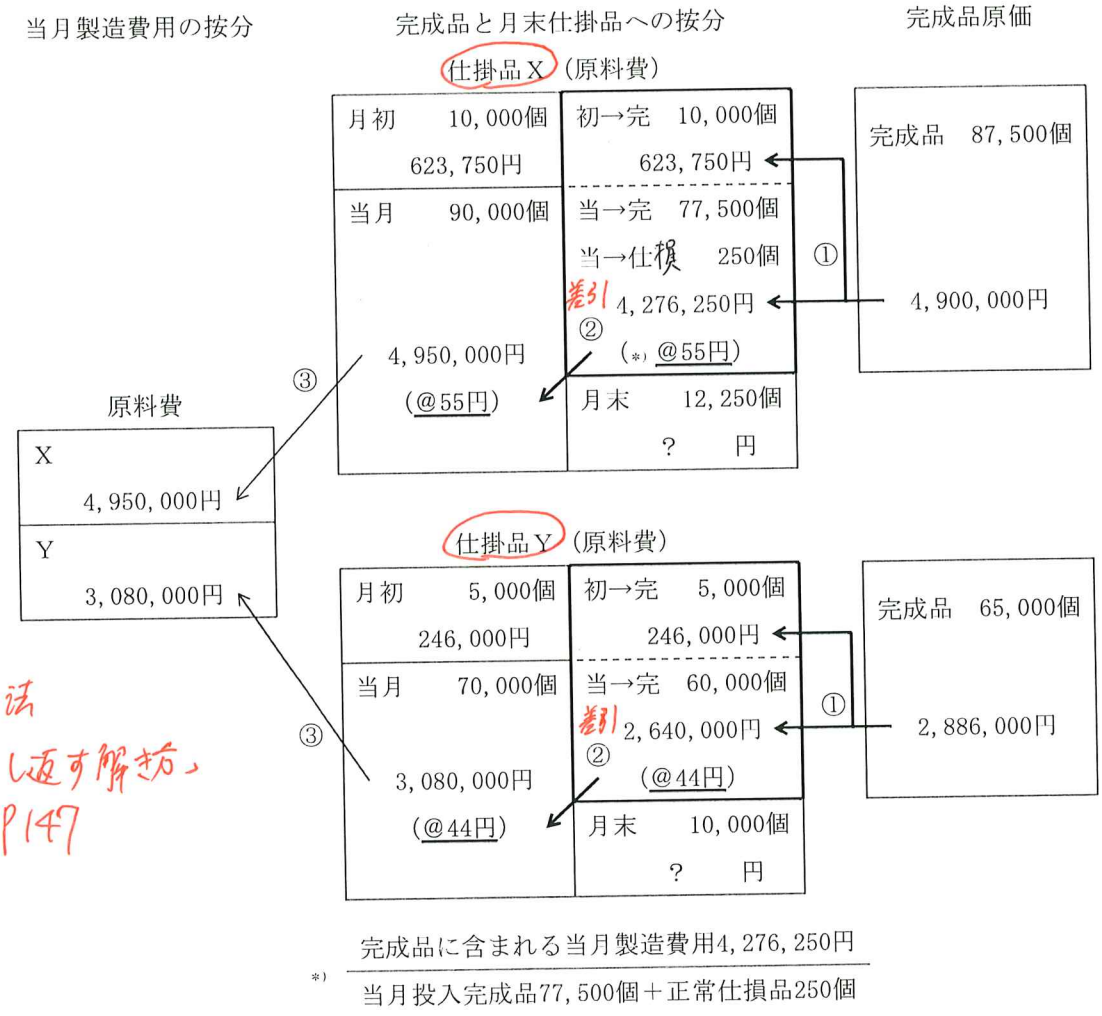
等級別総合原価計算（第３法，正常仕損，逆進推定）

→ 組別総合原価計算に近い方法 (P147, 142)

【解　説】

〔**資料**〕4.(1)の，「出来るだけ正確に等級製品の製造原価を把握するために，等価係数は原料費と加工費に区分して，当月製造費用を等級製品に按分する際に使用している。」との指示から，第３法であることが分かる。第３法の場合，等価係数は，各等級製品の当月投入単位原価の比率から求めることができることから，それが分かれば解答することができる。なお，解説では当月製造費用の按分までを示している。

１．原料費の計算



第3法 ⇒「押し返す解法」 P147

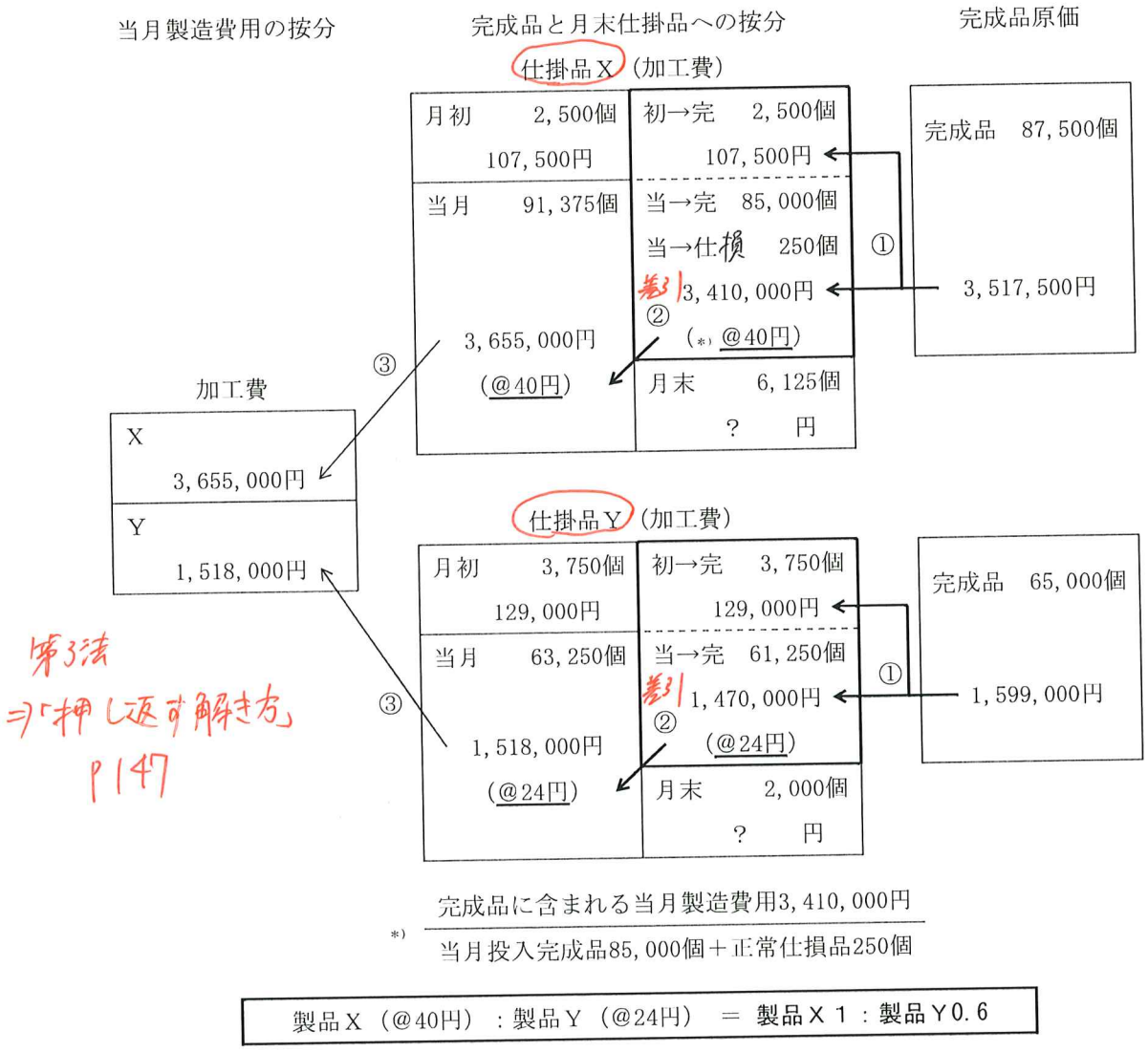
*) 完成品に含まれる当月製造費用4,276,250円 / 当月投入完成品77,500個＋正常仕損品250個

製品Ｘ（@55円）：製品Ｙ（@44円） ＝ 製品Ｘ１：製品Ｙ0.8

「仕損」と言えば「評価額」！
ただし，本問では，評価額はゼロ。

この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

２．加工費の計算



$$(*)\ \frac{\text{完成品に含まれる当月製造費用3,410,000円}}{\text{当月投入完成品85,000個＋正常仕損品250個}}$$

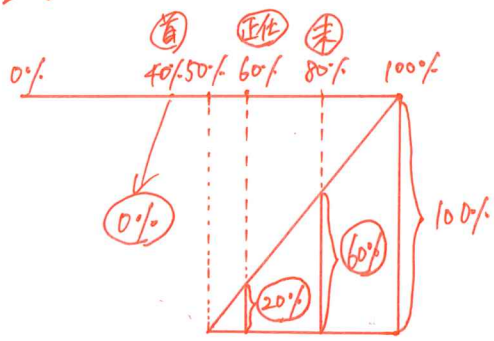
製品Ｘ（@40円）：製品Ｙ（@24円）＝ 製品Ｘ１：製品Ｙ0.6

以上より，正解は３となる。

4-5②

この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

(*1) 整理図(原料Bのコストビヘイビア)



問題6　正解　4　　難易度　A

【出題内容】

計算　総合原価計算（非度外視法，副産物，追加材料の投入）

【解　説】

原料Ｂの進捗度の計算に注意し，正答して欲しかった。

1．原価配分

原　料　A

月初	100kg	完成	9,800kg
	1,000千円	∴	124,240千円
当月	10,000kg		
		副産物 (*2)	50kg
	126,400千円	正損	50kg
			632千円
		月末	200kg
	(@12.64千円)	→	2,528千円

原　料　B

月初	0kg	完成	9,800kg
	0千円	∴	295,500千円
当月	9,980kg		
		副産物 (*2)	50kg
	299,400千円	正損	(*1) 10kg
			300千円
		月末	(*2) 120kg
	(@30千円)	→	3,600千円

加　工　費

月初	40kg	完成	9,800kg
	800千円	∴	216,620千円
当月	10,000kg		
		副産物 (*2)	50kg
	220,000千円	正損	30kg
			660千円
		月末	160kg
	(@22千円)	→	3,520千円

(*1) 正損 50kg × $\frac{60\%-50\%}{100\%-50\%}$ (*1)

(*2) 月末200kg × $\frac{80\%-50\%}{100\%-50\%}$ (*1)

(*2) 終点発生だから。
P161 ①i

正常仕損費

合計	9,950kg	完成	(*) 9,750kg
	1,592千円		1,560千円
		月末	200kg
	(@0.16千円)		32千円

(*) 計算上の完成品(9,800kg＋50kg)－月初100kg

「仕損」と言えば「評価額」。
ただし、本問では評価額ゼロ。
副産物は評価額あり。

2．当月の完成品原価の計算（▨部分）

原料Ａ124,240千円＋原料Ｂ295,500千円＋加工費216,620千円＋正常仕損費1,560千円

－副産物評価額(@５千円×50kg)＝**637,670千円**

忘れるな！
逆に、これを引き忘れた 5.「637,920千円」は
引っかけ肢。(差額法によるテクニック)
一瞬で答えが出る。

以上より，正解は４となる。

P116
非度外視法では、分離点把握した
正常仕損費を合算したものを追加面に賦課する。

この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

バッチ(ロット) ← P313脚注
⇒1回の生産(製造)や1回の購入などの単位のこと。

問題 7　正解 3　難易度 A

【出題内容】　P125

計算　総合原価計算（減損率が安定している場合）

非度外視法

バッチ(ロット)生産に対応する製品別計算
⇒総合原価計算を適用する場合，原価の集計単位は期間生産量となる。
バッチ(ロット)の違いは，関係がない。
↖P85

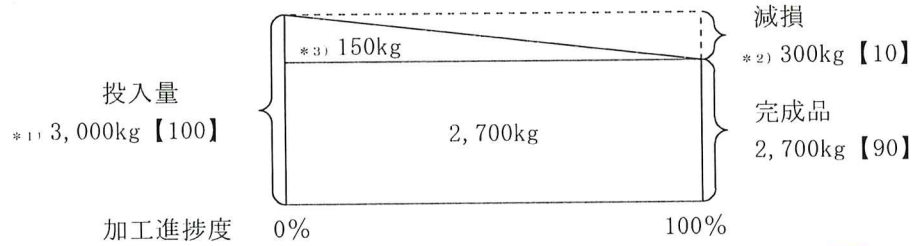
【解　説】

平易な問題であるため，確実に正答して欲しかった。

1．数量関係の把握と加工費の完成品換算量

本問の生産状況を図で示すと，以下のようになる（実線部分が原料数量，破線部分が減損量を示しており，【　】内の数値は，始点投入量100に対する減損率と歩留率を示す）。

(1) 投入完成品（第１バッチ，第２バッチ）



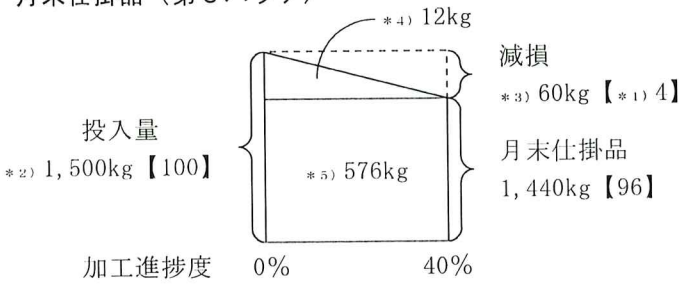
＊1) 第１バッチ1,000kg＋第２バッチ2,000kg

＊2) 投入量3,000kg－完成品量2,700kg

＊3) 減損量300kg×1/2

台形
原料費⇒左端線
加工費⇒面積

(2) 月末仕掛品（第３バッチ）



＊1) 工程終点減損率10%×加工進捗度40%

＊2) 〔資料〕1.より

＊3) 投入量1,500kg－月末仕掛品量1,440kg

＊4) 減損量60kg×加工進捗度40%×1/2

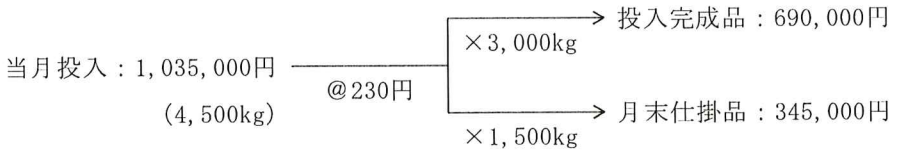
＊5) 月末仕掛品量1,440kg×加工進捗度40%

3枚の製造指図書があるが，それぞれを区別しない。← 総合原価計算。

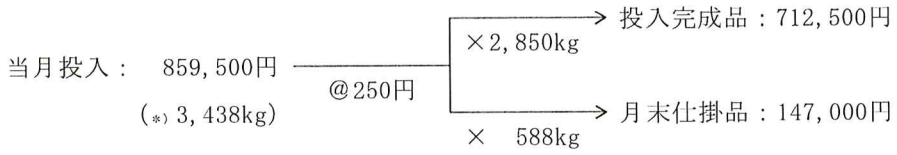
この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

非度外視法

２．原料費の配分



３．加工費の配分



*) 投入完成品(150kg＋2,700kg)＋月末仕掛品(12kg＋576kg)

４．完成品総合原価の計算

原料費690,000円＋加工費712,500円＝**1,402,500円**

以上より，正解は３となる。

この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

問題 6　正解 4　難易度 A

【出題内容】

計算　工程別総合原価計算（累加法，減損の処理，追加材料の投入）

【解　説】

平易な問題であるため，確実に正答して欲しかった。

1．第１工程の計算

原料費

当月	3,000kg	完成 ∴ 2,760kg	
			3,877,800円
		正減	40kg
	4,215,000円		56,200円
	(@1,405円)	月末	200kg
			281,000円

加工費

当月	2,830kg	完成	2,760kg
			1,551,120円
		正減	20kg
	1,590,460円		11,240円
	(@562円)	月末	50kg
			28,100円

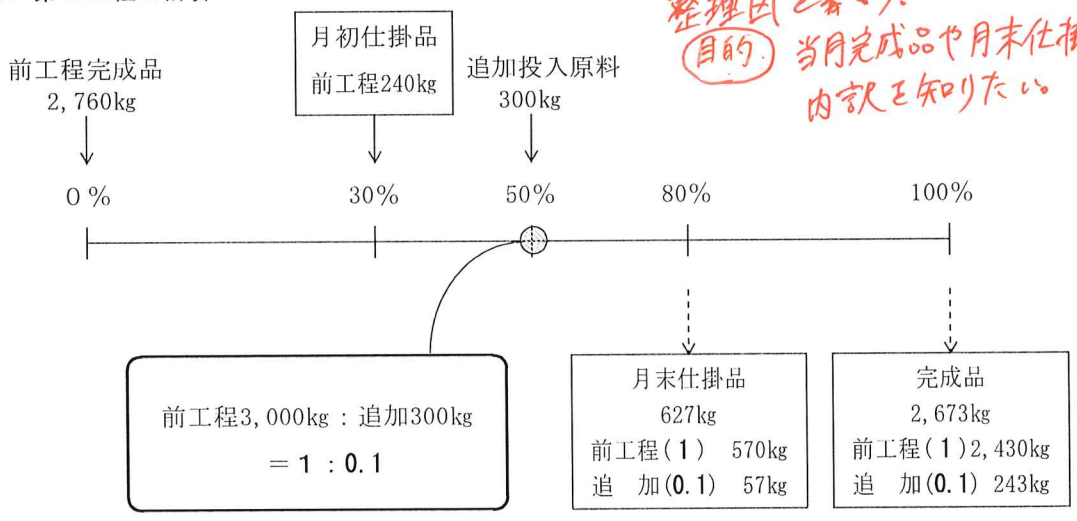
正常減損費

合計	2,810kg	完成	2,760kg
原料費	56,200円		66,240円
加工費	11,240円		
合計	67,440円	月末	*) 50kg
	(@24円)		1,200円

*) 月末仕掛品200kg×加工進捗度25%

第１工程完成品原価：（　　）5,495,160円

2．第２工程の計算



240 = 240 + 0

2,673 = 2,430 + 243

3,060 = 2,760 + 300

627 = 570 + 57

4-8①

この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

追加材料による増量分を考慮しない（資料3.(3)）
↖ P112 (3)

前工程費

月初	240kg	完成	2,430kg
	480,000円		
当月	2,760kg	∴	4,840,290円
	5,495,160円	月末	570kg
	(@1,991円)→		1,134,870円

加工費

月初	72kg	完成	2,430kg
	14,400円		
当月	2,814kg	∴	603,900円
	703,500円	月末	*) 456kg
	(@250円)→		114,000円

*) 月末仕掛品570kg×加工進捗度80%

原料費（追加）

月初	0kg	完成	243kg
		∴	303,750円
当月	300kg		
	375,000円	月末	57kg
	(@1,250円)→		71,250円

第２工程完成品原価：（　　）**5,747,940円**

以上より，正解は４となる。

この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

思考プロセス
①A組のアウトプット原価が問われている。
⇓
②A組へのインプット原価が必要。
⇓
③加工費を求めるためには、直労費を求める必要がある。
⇓
④等級別計算（第3法）のやり方を思い出す。

問題 8　正解 3　難易度 A

【出題内容】

計算　組別・等級別総合原価計算（第３法，非度外視法）

資料4.(4)「押し返す解法」

【解　説】

平易な問題であるため，確実に正答して欲しかった。

１．組製品Ａの直接労務費の計算

直接工賃率2,816円×直接作業時間*) 1,000時間＝2,816,000円

*) 組間接費は直接作業時間により組別配賦を行っているため，直接作業時間合計を各組製品の製造間接費に基づいて按分すれば，各組製品の直接作業時間を計算できる。

$$\frac{\text{直接作業時間合計4,500時間}}{\text{製造間接費合計（A300,000円＋B450,000円＋C600,000円）}} \times \text{A300,000円}$$

何となく電卓叩くのは無意味!!

２．当月製造費用の按分　P150 第1段階（度外視法，非度外視法共通）⇒インプット原価の確定手続

直接材料費

積数合計 5,300個	A１当積 2,000個 500,000円
1,325,000円 (@250円)	A２当積 *1) 3,300個 825,000円

加　工　費

積数合計 6,232個	A１当積 1,855個 927,500円
*3) 3,116,000円 (@500円)	A２当積 *2) 4,377個 2,188,500円

*1) 当月投入3,000個×等価係数1.1

*2) 当月加工2,918個×等価係数1.5

*3) 直労2,816,000円＋製間300,000円

３．等級製品Ａ２の完成品総合原価　P150 第2段階

直接材料費

当月 3,000個	完成 2,830個 778,250円
825,000円 (@275円)	正損 70個 19,250円
	月末 100個

加　工　費

当月 2,918個	完成 2,830個 2,122,500円
2,188,500円 (@750円)	正損 28個 21,000円
	月末 60個

正常仕損費

合計 2,930個	完成 2,830個 38,876円
40,250円 (@13.7…円)	月末 100個

完成品総合原価（□部分）：
直接材料費778,250円＋加工費2,122,500円
＋正常仕損費38,876円＝**2,939,626円**

以上より，正解は３となる。

P116 非度外視法では、分離把握した正常仕損費を合算したものを追加配賦する。

「仕損」と言えば、「評価額」。
ただし、本問では、評価額ゼロ。

この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

問題 5　正解 5　難易度 A

【出題内容】

理論（正誤）　総合原価計算

【解　説】

平易な問題であるため，確実に正答して欲しかった。

ア．**誤　り。**　各等級製品について適当な等価係数を定め，一期間における完成品の総合原価又は一期間の製造費用を等価係数に基づき各等級製品にあん分してその製品原価を計算する。（基準22）

イ．**正しい。**　（基準23）

ウ．**誤　り。**　加工費について期末仕掛品の完成品換算量を計算することが困難な場合には，当期の加工費総額は，すべてこれを完成品に負担させ，期末仕掛品は，直接材料費のみをもって計算することができる。（基準24(2)4）

エ．**正しい。**　（基準29）

以上より，正しいものはイ，エであり，正解は５となる。

この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

問題 7　正解 2　難易度 C

【出題内容】

計算　組別総合原価計算（非度外視法，副産物，追加材料）

【解　説】

問題文冒頭で説明されている生産状況の把握が難しいので，後回しにして欲しかった。

1．製品Ｂの計算

原料費　FIFO

月初	125kg	完成 ∴	500kg
	38,500円	∴	151,000円
当月	465kg		
	139,500円	異損	20kg
	(@300円)		6,000円
		月末	70kg
			21,000円

加工費　FIFO

月初	100kg	完成	500kg
	80,500円	∴	400,500円
当月	425kg		
	*1) 340,000円	異損	4kg
	(@800円)		3,200円
		月末	21kg
			16,800円

*1)（実際賃率1,200円＋予定配賦率*2) 800円）×実際直接作業時間0.4時間/kg

加工費⇒原料費以外の原価要素すべて（p104）　×当月加工量425kg

*2) 製造間接費予算14,400,000円÷予定直接作業時間18,000時間

製品Ｂ完成品単位原価：（原料費151,000円＋加工費400,500円）÷完成品量500kg＝@1,103円

2．製品Ａの計算

(1) 原料費と加工費の計算（追加材料投入前）

原料費　FIFO

当月	2,500kg	完成 ∴	1,850kg
			1,400,000円
		副	150kg
	1,750,000円	正損	100kg
	(@700円)		70,000円
		月末	400kg
			280,000円

加工費　FIFO

当月	2,330kg	完成	1,850kg
			800,000円
		副	150kg
	*) 932,000円	正損	50kg
	(@400円)		20,000円
		月末	280kg
			112,000円

正常仕損費

合計	2,400kg	完＋副	1,850kg＋150kg
	70,000円		75,000円
	20,000円		
	90,000円	月末	400kg
	(@37.5円)		15,000円

p116 非度外視法では、分離把握した正常仕損費を合算したものを追加配賦する。

← 豆腐の製造工程途中（50%点）で発生した正常仕損費を、終点で分離される副産物（おから）にも負担させるイメージ。

*)（実際賃率1,200円＋予定配賦率800円）×実際直接作業時間0.2時間/kg×当月加工量2,330kg

「仕損」と言えば、評価額。
ただし、本問では評価額ゼロ。

4-11①

この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

(2) 追加投入される製品Ｂの原価

追加材料投入前製品Ａ完成品量1,850kg×0.1＝185kg

製品Ｂ完成品単位原価@1,103円×追加投入量185kg＝204,055円

副産物からの利益はゼロ，と考えるパターン。

(3) 副産物評価額　P160 (2) 原則

(見積売却価格800円/kg－見積販売費及び一般管理費290円/kg)×副産物150kg＝76,500円

(4) 製品Ａ完成品原価　P161 (3) ①i

原料費1,400,000円＋加工費800,000円＋正常仕損費75,000円＋製品Ｂ204,055円

－副産物評価額76,500円＝**2,402,555円**

以上より，正解は２となる。

4-11 ②

この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

問題 6　正解 3　難易度 B

【出題内容】

計算　総合原価計算（追加材料の投入，非度外視法，累加法）

【解　説】

見慣れない指示が含まれているが，何とか正答して欲しかった。

１．当月加工費

(1) 製造間接費の予定配賦率

製造間接費予算15,000,000円÷予定直接作業時間30,000時間＝500円

(2) 加工費

Ａ 工 程：(予定賃率2,000円＋予定配賦率500円)×961時間＝2,402,500円

追加工程：(予定賃率2,000円＋予定配賦率500円)×132時間＝　330,000円

２．Ａ工程

原料費 α

月初	780kg	完成	1,880kg
	？　円		？＋660,000円
当月	∴ 1,980kg		(差額)
		正損	80kg
			48,000円
	1,188,000円	月末	800kg
	(@600円)		480,000円

加工費

月初	78kg	完成	1,880kg
	？　円		？＋2,252,500円
当月	∴ 1,922kg		(差額)
		正損	＊1) 40kg
			50,000円
	2,402,500円	月末	80kg
	(@1,250円)		100,000円

正常減損費

合計	1,960kg	完成	＊2) 1,880kg
	98,000円		94,000円
	(@50円)	月末	80kg

＊1) 正常減損80kg×50%

＊2) 〔**資料**〕3.(3)の，「完成品への負担計算では，月初仕掛分と当月投入分を区分しないものとする」から，完成品数量全体を用いる。

製品Ａ完成品総合原価：月初仕掛品原価572,500円＋原料費 α 660,000円＋加工費2,252,500円
＋正常減損費94,000円＝3,579,000円

P117 Ⓑ

P116
非度外視法では，分離把握した正常仕損費を合算したものを追加配賦する。

普通は，月初含まない！
P123

4-12 ①

この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

３．追加工程

① 問題文冒頭にある，「当月に完成した製品Ａのうち半分の量に対して，同量の原料βを追加投入しこれを加工し完成品となる」との指示から，製品Ａ940kg(＝1,880kg÷２)を追加工程に振替え，原料β940kgを追加投入したと判断する。

② 〔資料〕1.当月生産データから計算した当月製品Ａ投入量及び原料β合計は1,880kg(＝完成品1,000kg＋月末仕掛品700kg＋正常仕損品180kg)であることから，追加材料の投入により生産量が増加するケースと判断する。ただし，製品Ａと原料βは追加工程の始点で投入されることから，以下ではまとめて計算している。

③ 〔資料〕3.(2)に，「正常仕損は工程の終点で発生しており」とあることから，正常仕損費は完成品のみ負担と判断する。なお，度外視法でも非度外視法でも計算結果は変わらないため，便宜上度外視法を用いる。

前工程費(製品Ａ)＆原料費β

当月	∴ 1,880kg	完成	1,000kg
			1,416,000円
前	*) 1,789,500円	正損	180kg
β	466,500円		
	2,256,000円	月末	700kg
	(@1,200円)		

追加工程加工費

当月	∴ 1,320kg	完成	1,000kg
			295,000円
		正損	180kg
	330,000円	月末	140kg
	(@250円)		

*) 製品Ａ完成品総合原価3,579,000円÷２

製品Ｂの完成品総合原価：前工程費(製品Ａ)＆原料費β1,416,000円
＋追加工程加工費295,000円＝1,711,000円

４．製品Ｂの単位当たり完成品原価

$$\frac{\text{製品Ｂ完成品総合原価1,711,000円}}{\text{完成品量1,000kg}} = 1,711\text{円}$$

4-12 ②

この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

問題 6　正解 6　難易度 A

【出題内容】

理論（正誤）　総合原価計算

【解　説】

平易な問題であるため，確実に正答して欲しかった。

ア．誤　り。　等級製品の原価計算に採用される等価係数として，正常市価基準によるものは認められていない。（基準22）P159. 2(1)

イ．誤　り。　連産品の場合，総合原価は，分離点における連産品の正常市価等に数量を乗じた金額に基づいてあん分される。（基準29）P152

ウ．正しい。　（基準29）P152~153

エ．正しい。　（基準28）P160

4-13

この解答速報の著作権はＴＡＣ(株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

問題 5　正解 2　難易度 A

【出題内容】

計算　総合原価計算（度外視法，異常仕損，累加法）

【解　説】

正常仕損費の負担先に関する指示がないが，以下のように判断し，確実に正答して欲しかった。

・両工程とも正常仕損が工程の途中点で発生しているため，正常仕損費を月末仕掛品に負担させる。P118(2)②

・第一工程の異常仕損は正常仕損の発生点を通過しているため，正常仕損費を異常仕損品にも負担させる。P131(1)

1．第一工程の完成品総合原価（正常仕損1/5＜異常仕損3/5：三者負担）

A材料費　FIFO

月初＋当月	~~3,150個~~	完成	2,300個
	3,050個		4,830,000円
月初	402,000円		
当月	6,003,000円	~~正損~~	~~100個~~
合計	6,405,000円	異損	50個
	(@2,100円)	月末	700個

加工費　FIFO

月初＋当月	~~2,550個~~	完成	2,300個
	2,530個		9,200,000円
月初	817,200円		
当月	9,302,800円	~~正損~~	~~20個~~
合計	10,120,000円	異損	30個
	(@4,000円)	月末	200個

第一工程完成品原価：A材料費4,830,000円＋加工費9,200,000円＝14,030,000円

2．第二工程の完成品総合原価（両者負担）

前工程費　FIFO

月初＋当月	~~2,500個~~	完成	2,100個
	2,400個		＊13,650,000円
月初	1,570,000円		
当月	14,030,000円		
合計	15,600,000円	~~正損~~	~~100個~~
	(@6,500円)	月末	300個

加工費　FIFO

月初＋当月	~~2,400個~~	完成	2,100個
	2,340個		＊4,620,000円
月初	475,800円		
当月	4,672,200円		
合計	5,148,000円	~~正損~~	~~60個~~
	(@2,200円)	月末	240個

B材料費

当月	2,100個	完成	2,100個
	248,000円		＊248,000円

＊　合計：**18,518,000円**

「仕損」と言えば、評価額。
ただし、本問では評価額ゼロ。